

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業

研究成果報告書



令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：32660

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00669

研究課題名（和文）ラベル理論に基づくvP構造の解明

研究課題名（英文）Exploration of vP structure from Labeling Theory

研究代表者

菅野 悟（KANNO, SATORU）

東京理科大学・教養教育研究院神楽坂キャンパス教養部・准教授

研究者番号：80583476

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、生成文法のラベル理論の枠組みで、動詞句内部の構造を明らかにすることである。CP領域のCやTのラベル付けに関しては、意見の一致が形成されつつあるが、動詞句内のラベル付けに関しては不明な点が多く残されている。そこで、本研究では、Swallow構文、寄生空所構文、主語句内部からの抜き出しなどを通して、動詞句の構造、および、ラベル付けの方法をより明確化する。さらに、ここでの研究がさらに発展され、ラベル付け全般に関わる現象の解明へと研究が進められている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、生成文法のラベル理論に依拠している。ラベルは統語対象物がインターフェースで解釈する際に必須の情報となる。本研究を通し、動詞句内部でのラベル付けに対する提案がなされている。この提案がラベル理論に対する貢献となる。さらに、近年の生成文法がラベル理論を中心に展開している点を考慮すれば、本研究は、生成文法の理論的推進に貢献していると言える。また、生成文法の最終的な目標となる、人間が有する言語機能の解明の基盤となると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the structure of verb phrases within the framework of the label theory of generative grammar. While a consensus is forming regarding the labeling of C and T in the CP domain, much remains unclear regarding the labeling inside verb phrases. Therefore, this study clarifies the structure of verb phrases and labeling algorithm through examining swallow constructions, parasitic gap constructions, and extraction out of subject phrases. Furthermore, this research is being further developed to the exploration of labeling in general.

研究分野：英語学

キーワード：統語論 生成文法 動詞句 ラベル付け 一致操作 寄生空所構文 主語句内部からの抜き出し

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、生成文法の極小主義の枠組みの下、研究が進められている。特に本研究が依拠する理論的枠組みはラベル理論である。ラベル(label)に関しては、生成文法初期の理論より、その重要性が認識されていたが、ラベル付け(labeling)に関しては、近年に至るまで不明な点が残されていた。例えば、初期の生成文法においては、ラベルは句構造規則によりその付与が明示されていたが、ラベル付けに関しては記述にとどまっていた。GB 理論の枠組みにおいて、句構造規則は X' 規則へと一般化され、内心構造が規定されたのみであり、この枠組みにおいても、まだ原理的説明となるには、不十分であった。

(2) ラベル理論において、初めてラベル付けに対する原理的な説明が与えられることとなる。このラベル付けは、併合操作を簡素化する研究と大いに関わる。初期の極小主義において、併合操作(Merge operation)の一部として、ラベル付けも規定されていた。しかし、併合操作はより簡素化されるべきという考えを推し進めると、併合操作から切り離され、ラベル付け操作が独立した操作であることとなる。さらに、ラベル付け操作が第3要因原理(third factor principles)から、帰結として生じることにもなる。このような考察の結果、最小探査から生じるラベル付けアルゴリズム(labeling algorithm)と呼ばれる操作が提案されることとなる。この操作は、主要部と探査(search)する操作であり、局所的な主要部が、その投射のラベルとなるとする考えである。これによりラベル付けに原理的な説明が与えられることとなる。また、ラベル付けアルゴリズムの詳細に関しては、より研究を進める必要があり、この研究を通して、極小主義の枠組み、さらには、UGへの貢献が期待できると考えられる。

(3) さらに、近年では、併合が、さらに簡素化され、フォームコピー(FormCopy)という独立した操作が提案される。併合操作から内的併合と外的併合を区別する仕組みを取り除くこととなる。統語上に統語対象物(syntactic object)が2つ存在する場合、フォームコピーが随意的に適用され、適用の結果、両者が他方のコピーであることとなる。従来の考えでは、ある統語対象物に内的併合が適用され、上位へ「移動」と考えられてきたが、近年の理論的枠組みにおいては、2つの統語対象物が内的併合であるか、外的併合であるかは、フォームコピーに依存することになる。

(4) 以上のように、近年の枠組みでは研究上の大きな進展が観察され、ラベル付けのメカニズム、フォームコピーの働きに大きな注目が集まっている。

このような理論的な背景のもと本研究が開始された。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、上述のラベル理論にもとづき、vP 構造を解明することにある。先行研究において CP 領域の中の C と T のラベル付けにはある程度の意見の一致をみることとなったが、vP 領域に関しては、様々な意見が出され、未だに一致しか見解が得られていない。また、vP 内の構造に関しても不明な点が多く残されている。このため、vP 内部でのラベル付けを明らかにする必要がある。

(2) さらに、近年、極小主義における道具立ての簡素化が非常に重視されている。この点からすると、従来想定されてきた一致操作(Agree operation)や素性継承(feature inheritance)の操作をより詳細に検討する必要がある。これらの操作は初期極小主義の枠組みでは、中心的な働きをすることが仮定されてきた。ラベル理論を採用するにあたり、これら2つ操作がどのような働きをしているのか、また、存在意義を解明することが必要であり、また、必要であれば、修正を行う必要がある。この点も本研究の目的となる。

(3) 最後に、近年の生成文法では、理論的側面が重視され、経験的な現象が軽視される傾向がある。このため、ラベル理論の枠組みで研究するにあたり、経験的事実とのバランスを十分考慮し、ラベル理論に貢献することも目的とする。

3. 研究の方法

(1) 動詞句内部の構造を解明するにあたり、まず、動詞句内部でどのような素性継承が生じているのかを解明する必要がある。CP 領域と同様、vP 領域でも、まず素性継承が適用され、次に、素性共有が生じると予測されている。このため、前者を明確にすることが、vP 構造の明確化の前提となる。

(2) 次に、動詞句に生起する付加詞の性質を明らかにする必要がある。ラベル理論においては、主に項に焦点が当てられているが、vP 構造をより明らかにする試みにおいては、付加詞がどの

ようなラベル付けの関係になっているかを明らかにする必要がある。このため、付加詞が生じている構文を研究対象とし、研究を進める。

(3) ラベル理論において素性継承が重要な働きをすることは、(1)での通りである。しかし、素性継承の結果、 φ 素性はラベル付け以外の機能も果たしていると考えられる。この考えのもと、抜き出し現象を研究対象としている。この理由は、本研究の予備研究において、 φ 素性と抜き出しが関連づいている可能性があるという結果が得られたためである。抜き出し現象を通し、素性継承を明らかにし、そこから、vP のラベル付けを解明することを研究方法とする。

(4) 最後に、フォームコピーの特徴を解明するため、素性間の同一性に着目するという研究方法を採用する。従来、フォームコピーは句のレベルで適用されると考えられてきたが、フォームコピーの性質のより詳細を把握するためには、句より小さいレベルである素性に着目することが有意義であると考えられるためである。

4. 研究成果

(1) 本研究の第1の研究成果として、寄生空所構文(parasitic gap construction)に対する理論的・経験的貢献と、付加部へのラベル付けに関する提案が挙げられる。

生成文法の極小主義の枠組みにおいては、全ての操作に原理的な説明が与えられるべきと仮定されている。本研究の貢献はまず理論的な点にあり、寄生空所構文の分析から非原理的な説明を排除し、原理的に導かれる仮定のみに基づき、理論形成を行う点である。この目的のため、本研究においては、比較的研究が進んでいるドイツ語の部分移動構文(partial movement construction)を考察する。この部分移動構文においては、上位にあるwh句が、下位のwh句に[+Q]素性を素性継承していると考えられる。

ここで重要な点は、[+Q]の素性継承が、補部位置に存在するCをターゲットとしている点にある。[+Q]素性の素性継承に対する制限がないとすると、付加部を導入するCをターゲットとし、[+Q]を素性継承することが可能であると予測される。実際、その予測通り、寄生空所構文においては、付加部のCへと素性継承が生じていると分析することができる。このように、この分析の理論上の利点は、すでに原理的に確立された規則のみを採用している点にある。

さらに、本研究では、寄生空所構文に生じる付加部がvPに付加するという先行研究を前提にして研究を進めている。その時、すぐに問題となるのが付加詞に対するラベル付けである。本研究では、これに関する解決策として主要部移動を採用している。具体的には、主要部は元位置で投射するだけでなく、移動後に再度投射するという再投射(reprojection)の仮説を採用する。再投射の考えを付加部のレベル付けに採用した提案は理論的に新しいものであり、新しい可能性を提示する研究結果を提示している。

この研究成果は、発表では、“A Licensing Mechanism of the Parasitic Gap Operator,” (Kanno 2020)として、国際学会のワークショップ(Some Concepts and Consequences of MERGE in the 13th International Spring Forum of the English Linguistic Society of Japan, Kansai University.で報告された。

また、論文では、“A Licensing of the Parasitic Gap Operator,” (Kanno 2021)として、*Studies in English Linguistics and Literature* 31 (p. 39-167)に掲載されている。

(2) 第2の研究成果として、主語句内部からの抜き出しに対する研究が挙げられる。先行研究において、他動詞の主語句内部からの抜き出しはできないが、一方、繰り上げ構文の主語句や、受け身文の主語句の内部からは、抜き出すことが可能ということが論じられている。しかし、このような一般化は妥当ではなく、一致現象に焦点をあたることにより、より妥当な分析を提示できることを論じている。この研究成果は、一致操作に対する貢献を成す。まず、理論的点から考察すれば、一致操作は統語において重要な役割を果たす操作であり、この結果、様々な現象を一致操作に還元することは理論上、望ましいと考えられる。このため、主語句内部の抜き出し現象を一致現象と関連付ける本研究は、理論上有益である。次に、本研究では、先行研究に対する経験的な問題も指摘する。具体的には、先行研究対しての問題点は3点あげられる。まず、動詞後ろに後続する述部がステージレベル述部(stage-level predicate)であるか、個体レベル述部(individual-level predicate)であるかにより、抜き出しが適用された際の文法性が分かれ、この事実に対する研究は十分になされてこなかった。第2に動名詞句が主語位置に生起する場合、その動名詞句内部から抜き出しが可能であり、たとえ主節の動詞が他動詞であれ、文法的である。第3に、不定詞の主語は、内部からの抜き出しを許す。また、ここでも同様に、不定詞内に他動詞が生起している場合であれ、そのような抜き出しが可能である。

以上の特性を一致現象の点から説明するため、本研究では、部分的ラベル付けを提案する。部分的ラベル付けとは、 φ 素性を構成する数素性(number feature)と人称素性(person feature)が別々に素性共有(feature sharing)の対象となるとする考えである。この提案を採用し、 φ 素性全体と素性共有の関係にある名詞句の内部からは抜き出しができないと本研究は提案する。この提案により上述の特性を説明することができる。

本研究の成果は、“A Labeling Account of Extraction out of Subject Phrases,” (Kanno

2023)として、*Studies in English Linguistics and Literature* 33 (p. 21-45)に掲載されている。

(3) 本研究の第3の成果として、目的語が動詞の先行する構文(本研究による名称はスワロウ構文(Swallow constructions))が挙げられる。スワロウ構文では、目的語が動詞の前に動じる特殊な構文であり、その存在は以前から知られてきたが、統語的なvP構造の分析は不十分であった。本研究では、スワロウ構文の統語的な特徴に焦点を当て、その詳細を提示している。また、理論的な貢献として、vP内部で多様な素性継承のパターンが存在する可能性を提示している。

スワロウ構文では、目的語が動詞に先行するため、従来提案されてきた分析だけでは不十分であるが、一方、極小主義の点から、非原理的な仮定は排除されなければならない。この点を考慮し、本研究では、フォーカス素性(focus feature)であれ、素性共有の対象となると提案する。このため、本来的にフォーカス素性を持つ目的語が、vPの先端位置(edge position)へ移動した場合、<Focus, Focus>のラベルがvPに付与されることになる。また、vPの先端位置は、動詞に先行する位置となり、当該構文特有の語順が生成されることになる。

さらに、本研究のフォーカス素性に依存する分析を支持する証拠が定性効果から示される。スワロウ構文の目的語は定名詞句が生じることができず、不定名詞句でなければならない。この点は、本研究が提示した新しい経験的な事実である。この定性効果にはフォーカス素性が関与していることが先行研究より示されている。具体的には、there構文において、名詞句は元位置から上位の位置へと移動するが、その移動にはフォーカス素性が関わっていると提案されている。このため、定性効果は、フォーカス素性が示す一般的な特徴であり、この効果がスワロウ構文でも観察されるという事実は、当該構文にフォーカス素性が関わっているという証拠となる。

本研究の成果は複数の学会で発表された。まず、「英語における特殊形式の起源と歴史的変遷 アメリカ英語とイギリス英語の違いに注目して」(共同発表：近藤亮一・田中祐太・菅野悟・大塚智昇，2022)として、弘前大学人文社会科学部地域未来創成センター令和3年度地域未来創成教育・研究プロジェクト「地方から公共性を問い直す ローカルメディアを基点として」(弘前大学)および、「目的語+動詞構文の諸特徴」(菅野悟・近藤亮一・田中祐太・大塚智昇，2022)として、日本英語英文学会第31回大会(オンライン開催)で発表された。

また、論文では、“The Overt Focus Movement to vP Periphery in English”(Satoru KANNO, Tomonori OTSUKA, Ryoichi KONDO, Yuta TANAKA, 2023)として、国際学会 The 16th ELSJ International Spring Forum, Online (Zoom)で発表された。また、“The Overt Focus Movement to vP Periphery in English,”(共著：Satoru KANNO, Tomonori OTSUKA, Ryoichi KONDO and Yuta TANAKA 2024)として、*JELS 41: Papers from the Fifteen International Spring Forum May 14-15* (p. 253-264), 253-264として掲載されている。

(4) 本研究の第4の成果は、目的語繰り上げ構文(raising to object construction)に観察される移動の随意性に原理的な説明を与えている点にある。近年、この構文に対しては、移動が随意的であると主張され、多くの研究者がその提案を受けて入れつつある。しかし、移動が随意的であると考えた場合、近年の極小主義の枠組みでは、どのようにその移動の随意性を捉えるのが問題となる。

本研究では、vP内の構造にその理由があると結論付ける。具体的には、動詞句内部では、V(もしくは、ルート(R))がvに移動する操作が仮定されている。この時、先行研究に従えば、vが不可視的となる仮定されている。しかし、原理的には、Rが不可視的となることがあり得る。このように、動詞句内部で、どちらの結果も可能であると仮定をすると、目的語繰り上げ構文に観察される移動の随意性に説明が与えられることになる。目的語が上位に繰り上がる場合、vが不可視的となる。Rには素性継承の結果、 φ 素性が存在するため、上位に移動したRと目的語の間で素性共有の関係に入り、ラベル付けがなされる。一方、目的語が下位に留まるパターンも存在する。その場合、不定詞節内のTには人称素性のみが素性継承される。また、主要部移動の結果、Rが不可視的となる。Rが不可視的であるため、目的語が上位に移動できないこととなる。

この研究成果は、発表では、「ラベル理論における主要部の(不)可視性と移動の随意性」(菅野悟・田中祐太・大塚智昇・近藤亮一，2022)として、日本英文学会東北支部第77回大会(岩手大学)で発表され、Proceedingsでは、「ラベル理論における主要部の(不)可視性と移動の随意性」(共著：菅野悟・田中祐太・大塚智昇・近藤亮一，2023)として、日本英文学会東北支部第77回大会 Proceedings(オンライン)に掲載されている。

(5) 本研究の第5の研究成果として、付加詞節の内部からの抜き出しに関する萌芽的研究が挙げられる。本研究では、付加詞節に焦点を当て、その中でも抜き出し現象の研究を行った。このように、付加詞節内部からの抜き出し現象を対象とした理由は、vPの内部構造を詳細に検討する際、項だけではなく、vP付加詞に対する分析が必要となるためである。

まず、先行研究において、付加詞節内部からの抜き出しは一般的に著しい文法性の低下が観察されるとされている。しかし、近年の研究において、付加詞節が不定詞節である場合、項を抜き出すことができると論じられている。このような場合、本研究では、不定詞節の付加詞を導入するCが非フェーズとなると提案する。この移動が可能となるのは、Cが非フェーズであり転送の対象とならないためである。さらに、付加詞節内部からの抜き出しは、定形節の場合であれ、容

認められることがある。本研究を通し解明された点は、このような定形節のCが欠如的であるという点である。このため、抜き出しを容認する定形の付加詞節は、非定形節と同様、Cは転送の対象とはならない。

このように、付加詞節内部からの抜き出しが可能となる原理的な理由を与えるとともに、抜き出しが実際に可能となる様々な経験的証拠を提示した。

以上の研究成果は、「付加詞からの抜き出しと主要部移動」(菅野 2021)として、日本英語学会第39回大会ワークショップ「コピーに関わるメカニズムと経験的帰結」、オンライン、および、「付加詞節内部からの抜き出しとCPフェーズ」(菅野 2023)として、日本言語学会第166回大会、専修大学(神田キャンパス)およびオンラインで発表されている。

(6) 本研究の第6の成果は、どの範疇が移動できるのか、という問題に原理的な説明を与えることができる点にある。先行研究において、フェーズは移動できるが、非フェーズは移動できないという一般化が提示されてきた。しかし、この一般化に対し、どのような原理的な説明が与えられるかに関して、依然として不明な点が多く残されていた。このため、本研究では、素性間にもフォームコピー(FormCopy)が適用されると提案する。

このフォームコピーに関しては、2つの統語対象物(syntactic object)に対して機能すると提案されてきたが、本研究の重要な点は、素性間でもそのフォームコピーが機能すると提案している点にある。この提案が正しいとすると、素性継承がなされるとき、Cに存在する素性と、Tへと継承された素性間にフォームコピーが働き、素性間の同一性が保たれることになる。もし、素性間にフォームコピーが適用されない場合、内的併合と外的併合を区別できないマルコフ型(Markovian)の現在の理論では、同一性が保持できないことになってしまう。

この点を考慮すると、非フェーズであるTPが移動できない理由に原理的な説明が与えられる。いったん、CからTへと素性継承が行われたのち、TPが移動してしまうと、Tに存在する素性とCの素性の同一性が保てなくなり、インターフェースで別の素性と判断されることになってしまう。この結果、フェーズのみが移動の対象となることに原理的な説明を与えることができる。

この研究成果は、“A Note on Movable Size: FormCopy Does Operate between Features,” (共著: Ryoichi KONDO, Tomonori OTSUKA, Yuta TANAKA and Satoru KANNO, 2023)として、Tokai English Studies 5j (p. 31-47)に掲載されている。

(7) 本研究の第7の成果は、フォームコピーを拡張することにより、外置構文に対する新たな分析を提示した点になる。上述のように、フォームコピーは近年の枠組みで非常に重要な働きをする。このため、このフォームコピーを理論的道具立てとして用い、構文分析に貢献することができれば、近年提案されている枠組みに対する理論的・経験的な支持を与えることになる。

先行研究において、it 外置構文は2種類に分けられることが提案されている。具体的には、一方のit 外置構文では、that節を主語にすることが可能であるが、他方の構文では不可となる。また、一方のitはPROを統御(control)することが可能であるが、他方のitではそれができない。先行研究によれば、これらを含む様々な違いは、主題役割に還元できることが提案されている。一方で、フォームコピーに関する先行研究において、pro (little pro)が下位に存在する場合、フォームコピーが適用されると分析が存在する。しかし、原理的には、上位にproが存在し、下位のXPとフォームコピーの関係に入ることが可能であると予測される。外置構文に見られる2種はこのフォームコピーの違いを反映したものであると本研究は論じている。

この研究性は、発表では、「Copy Formationと外置構文」(大塚智昇・近藤亮一・田中祐太・菅野悟, 2022)として、日本英文学会九州支部第75回大会(西南学院大学)で発表された。また、論文では、「Copy Formationとproに関する諸考察」(共著: 大塚知昇・近藤亮一・田中祐太・菅野悟, 2024)として『福岡言語学会50周年記念論文集』開拓社(p. 193-206)で掲載されている。

(8) 本研究の第8の成果として、素性継承を理論的枠組みから排除し、素性共有に頼ることのないラベル付けを提案した萌芽的研究が挙げられる。素性継承は様々な言語現象に関わると仮定されてきているが、その一方で、理論的な問題点も多く指摘されてきた。本研究では、ラベル付けのメカニズムとして、一致操作に還元することを試みている。具体的には、弱主要部(weak head)は、フェーズ主要部と一致関係に入ることにより投射可能となると提案する。これにより、素性共有が生じていない弱主要部であれ投射可能であることに理由を与えることができる。具体的には、進行形に生じるProg主要部、小節を導入するPred主要部、また、不定詞節のTは、Cとの一致を通し、投射可能となる。さらに、動詞句内部に存在する機能範疇はvとの一致を通して投射可能となる。

この研究成果は、「統語素性の役割」(菅野悟 2023)として、北海道理論言語学研究会第15回大会(旭川医科大学)で発表されている。

(9) 最後に、本研究を通し、多くの記述的事実を提示することができ、また、理論的進展を達成することができた。ラベルは言語機能にとって中心的な働きをすることが近年の研究で明らかにされた。本研究の成果は、vP構造の解明を通し、ラベル理論に対する重要な貢献ができたといえる。さらに、この研究を通し、vP構造に関わる操作である、一致操作や素性継承操作の解明に貢献したと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Satoru Kanno	4. 巻 33
2. 論文標題 A Labeling Account of Extraction out of Subject Phrases	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Studies in English Linguistics and Literature	6. 最初と最後の頁 21-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Satoru KANNO, Tomonori OTSUKA, Ryoichi KONDO and Yuta TANAKA	4. 巻 41
2. 論文標題 The Overt Focus Movement to vP Periphery in English	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 JELS 41	6. 最初と最後の頁 253-264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Ryoichi KONDO, Tomonori OTSUKA, Yuta TANAKA and Satoru KANNO	4. 巻 5
2. 論文標題 A Note on Movable Size: FormCopy Does Operate between Features	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 A Note on Movable Size: FormCopy Does Operate between Features, " Tokai English Studies	6. 最初と最後の頁 31-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Satoru Kanno	4. 巻 31
2. 論文標題 A Licensing of the Parasitic Gap Operator	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Studies in English Linguistics and Literature	6. 最初と最後の頁 139-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Satoru Kanno, Hisatsugu Kitahara, Nobuhiro Miyoshi, Miki Obata	4. 巻 38
2. 論文標題 Some Concepts and Consequences of MERGE	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JELS 38: Papers from the Thirty-Eighth Conference November 7-8, 2020 and from the Thirteenth International Spring Forum of The English Linguistic Society of Japan,	6. 最初と最後の頁 255-256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Satoru KANNO, Tomonori OTSUKA, Ryoichi KONDO, Yuta TANAKA
2. 発表標題 The Overt Focus Movement to vP Periphery in English
3. 学会等名 The 16th ELSJ International Spring Forum (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 菅野悟
2. 発表標題 一致と最小探査
3. 学会等名 北海道理論言語学研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 大塚智昇・近藤亮一・田中祐太・菅野悟
2. 発表標題 Copy Formationと外置構文
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第75回大会
4. 発表年 2022年

1．発表者名 菅野悟・田中祐太・大塚智昇・近藤亮一
2．発表標題 ラベル理論における主要部の(不)可視性と移動の随意性
3．学会等名 日本英文学会東北支部第77回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 菅野悟
2．発表標題 付加詞節とCPのフェイズ性
3．学会等名 2021年度生成文法研究会
4．発表年 2021年

1．発表者名 菅野悟
2．発表標題 付加詞からの抜き出しと主要部移動
3．学会等名 日本英語学会第39回大会ワークショップ
4．発表年 2021年

1．発表者名 Satoru Kanno
2．発表標題 Feature Inheritance and Complement Clauses
3．学会等名 Hokkaido Theoretical Linguistic Society
4．発表年 2022年

1．発表者名 近藤亮一・田中祐太・菅野悟・大塚智昇
2．発表標題 英語における特殊形式の起源と歴史的変遷 アメリカ英語とイギリス英語の違いに注目して
3．学会等名 弘前大学人文社会科学部地域未来創成センター令和3年度地域未来創成教育・研究プロジェクト
4．発表年 2022年

1．発表者名 菅野悟・近藤亮一・田中祐太・大塚智昇
2．発表標題 目的語＋動詞構文の諸特徴
3．学会等名 日本英語英文学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 Satoru, Kanno
2．発表標題 A Licensing Mechanism of the Parasitic Gap Operator
3．学会等名 the 13th International Spring Forum of the English Linguistic Society of Japan (国際学会)
4．発表年 2020年

〔図書〕 計2件	
1．著者名 大塚知昇・近藤亮一・田中祐太・菅野悟	4．発行年 2024年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 354
3．書名 言語学からの眺望2023	

1．著者名 菅野 悟	4．発行年 2022年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 394
3．書名 ことばの様相 現在と未来をつなぐ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------